『山月記』成立期考

木村東吉

一

『山月記』に関する論考は世に多く、作品自体の評価は定まっているかに見える。が、その成立過程については不明の点が多々あり、作品成立の時期についてさえ、定説がない。この点の解明は、作品の創作意図について見る場合にも、作家の文学的行程の全体像を捉えようとする場合にも不可避の問題であるのだが、確実なところと言えば、その上限が昭和十四年（一九三九）三月であり、下限が十六年（一九四一）六月であるとされるぐらいであって、より詳細な点になると、論者ごとに各々の推定をしているのが実状である。

従来の諸説のうち、代表的なものだけを挙げてみても、次の三説がある。第一に、郡司勝義氏は、「古譚」四篇（『狐憑』『木乃伊』『山月記』『文字禍』）[注(1)]を昭和十五年から十六年前半の間の脱稿であろうとされ、『山月記』については、十六年四月（遅くとも五月初め）の成立であろうとされている。[注(2)]第二に、佐々木充氏は、「古譚」「古俗」の六篇を、昭和十四年春から十五年夏にかけての執筆ではないかとされる一方、『山月記』に関しては、遅くとも昭和十六年五月までとする説も示しておられる。[注(3)]浜川勝彦氏は、「古譚」および「古俗」の成立時期を『光と風と夢』の脱稿時期、昭和十六年一月より降ることはなく、昭和十五年末とするのが妥当であろうとされている。[注(4)]

このような状況を招いた原因には、今までの全集の不備ということもあったので、本稿では、昭和五十一年筑摩書房版「中島敦全集」（以下、「全集」と略称する。）等の資料に基づき、『山月記』成立過程解明のために、一つの試論を呈示してみたい。今次の「全集」にも、『山月記』の成立時期を直接的に確定するに足る物的資料があるわけではないが、しかし、文治堂版「全集」より整備されているので、これによって作者の創作ノート、手帖等の資料を検討してみれば、一つの推定が可能だと考えられる。試論として呈示する所以である。

二

「全集」第三巻に、「ノート第九」として収められた創作ノートがある。これは文治堂版で「第六帖」とされているものであって、特に新しい資料というわけではないが、旧版全集ではノートの頁数も付されておらず、ノート全体の様子を知る上で困難があり、それがこのノートの性格、メモの内容の詳細な吟味を妨げていた面がある。今次の「全集」によると、このノートに記されたメモには、四群に分けられた五種のものがあることがはっきりするのであるが、

その第一群ともいうべきメモの中に、次のようなものがある。

〔人間は〕〔各〕人間は誰も猛獣使ひで、それ〴〵自分の性情が、その猛獣に当るんださうだが、全く、ボクの場合、自尊心といふやつが、猛獣でしたよ。ねえ、全く、自尊心と、それから、もう一つ、羞恥心、こいつが曲者でね。大人しさうで決して、さうでない。ハイエナかジャカアルみたいな奴でね。ライオンにいつもジャカアル、がついてゐるやうに、自尊心にいつもこの羞恥心がくつゝいてゐるんだ、害を〔なす〕する点ではライオンよりジャカアルの方がひどいんですよ。ライオンには誰だつて警戒するが、ジャカアルには、誰も余り警戒を払はないからね。（「ノート第九」第七頁目より。傍線原文。）

これが、『狼疾記』から『山月記』に連なる「臆病な自尊心」の主題に関連するものであることは、一読して了解されよう。このメモに初めて注目された浜川氏は、この引用部分のメモだけを単独で取り出し、これをただちに『山月記』の草稿か、それに近いものと見ておられるが[注6]、これはおかしい。第一群メモを全体として捉えてみれば、そこには「人虎伝」の筋とは全く無関係な、場面を現代に設定したコント風の作品構想が浮かび上がってくるが、その中の一部として、このメモはあるのである。従って、このメモの解釈も、第一群メモ全体の中でなされるべきである。

このメモの構想の内容を要約してみれば、次の通りである。メモは、ノートの一頁目から九頁目までにわたっているが、一頁目のそれは、場面設定用のもので、総合すると、冬の夕方、ビルの屋上の一角に設けられたレストラン風の場所が浮かび上がってくる。二・三頁目のメモは、主として主人公の人物設定用のもの。メモによって点描される主人公像は、中年過ぎの貧相な紳士。足の膝の辺りをガタガタ小刻みに顫わせながら酒を飲んでいるのだが、健康も家庭的幸福も失っているらしい様子と共に、「本当にベニでもつけているのではないか？」と思わせる頬の赤さや、総入れ歯の下歯、「ギザギザになつて残つてゐる」上歯を見せて笑う容貌には、一種の異様さがある。四・五頁目には、一人語りする男の奇妙な話が写されているが、これは二頁目の冒頭にある「その話の前も知らない、あとも知らない。」を受けて展開されているものと思われ、途中から入って来て男の隣に席を取り、何の話かと尋ねた「私」に、男は自分が犬になって仔猫を噛み殺した時の話だという。語りながら、男は周囲の人々の反応を探っているが、誰も取りあわない。そこで、憤然とした面持ちをしながらも「仕方なしに、私をつかまへて話し出した。」と五頁目にある。これを受ける形で、六・七・八頁目には、その主人公の告白的身の上話の要点が、主人公の語り口で記されているものと見られる。前述の通り、「臆病な自尊心」に関するメモは、七頁目に見られる。六頁目には、現在では、もう生きられないと思い定めたので、かえってほっとした気持で、自分を舞台上の人物のように見ることができるとか、八頁目には、自分の悲しい運命は、はじめから自分に分かっていたような気がするとかいったことが記されている。最後の九頁目に「私はくしゆんと水洟をすゝり風邪をひいてはいけないぞと思つた。」とある一文は、この全体を締めくくるものであろう。話し手の人称が単数になったり複数になったりしていて、（おそらく、聞き手の「私」と主人公との関係が確定されていないためであろう。）幾分未整理な部分もあるが、概容を捉えてみれば、充分、短篇構想としてまとまっていることが理

解されよう。

ところで、この構想には、内に強い自尊心を持ち、それ故にかえってコンプレックスを増幅させている人物を、「私」という傍観者を通して描く形になっている点で、習作『虎狩』と共通するものがあるが、また、犬になって仔猫を散々に噛み殺した話をしている主人公のイメージには、虎におびえて気絶した勢子を、足で荒々しく蹴返しながら、「チョッ！怪我もしてゐない」といい捨てる趙大煥の態度の底にある豪族の血につながるものがある。一方、主題的側面からこれを見れば、「臆病な自尊心」を自己の性情と認め、その性情の導くところを運命とし、諦念をもってこれを受容しようとしている点で、『狼疾記』の続篇としての性格を持っている。そして、『山月記』とのつながりにおいてこのメモの構想を見るならば、まだ「古譚」としての構想はないが、獣に成り変わって語るという特殊な話術を持つ主人公を設定しているところに、やがて変身譚へと発展していく萠芽のようなものがうかがわれ、自分の人生を狂わせたものは、結局自分の性情であり、それが猛獣的自尊心と羞恥心であったと自己分析しているところ、人生の終局を意識した主人公に告白的に語らせているところ等、『山月記』の構想の骨格的部分が、ここに半ば成立していると見ることもできよう。ただし、ここでは、『山月記』の李徴の詩人となることへの執着に象徴される自己実現への強烈な願望、悔恨の背後に見える人生への断ち難い愛着といったものはなく、詩人のエゴと倫理の矛盾についての煩悶という主題も、まだ、ここでは取り上げられていない。

この構想メモと『山月記』との〃距離〃測定の問題は、改めて次節で取り上げることとして、まず、このメモの成立時期について考えておくことにしたい。

浜川氏は、この「ノート第九」の中に、『光と風と夢』の創作メモも記されていることをもって、直ちに、第七頁目のメモも『光と風と夢』執筆中のものと推定され、これが、「古譚」及び『光と風と夢』の同時的執筆説の根拠となっているのであるが、そうも言い切れまい。このノートは、「全集」の解題によれば、「横浜高等女学校昭和十四年度入学考査問題」用紙を裏返しにして綴じたものであるから、これによって上限は明らかであるが、ノート全体の様子から判断すれば、第一群のメモ（「臆病な自尊心」の主題を扱った構想メモ）の全体が、『光と風と夢』の構想の確立以前のものである可能性が強いのである。

ノートのメモの形態を吟味してみるならば、全体は七十四頁から成り、これに上述のように四群、五種のメモが記されているが、第一群は一～九頁に、第二群は二十七～三十七頁にわたっており、他の二群はノートを逆にして後の方から使う形になっているので、「全集」の翻刻順序に従えば、七十四頁（一頁だけ）のものが第三群、七十二～六十八頁のものが第四群ということになる。他の部分は余白である。メモの内容を考慮しつつ、これらのメモの成立順序を考えてみると、このノートは、本来、第一・二群に見られるように、短篇創作用のものであった形跡がある。というのは、第一・二群のメモが、まがりなりにも短篇作品の構想メモとしてのまとまりを持っており（ただし、第二群のメモの場合は、三頁分の空白を含み、構成も第一群のメモのそれに比して緻密さを欠いている。）、後に二、三十頁程度の草稿用にも使いうる余白を残す形になっているのに対して、第三・四群のメモは、明らかに部分的断片的性格が強い。第三

群のメモは、わずか一頁だけのもので、ごく簡単なメモにすぎないが、内容はさらに二種のものに分けられ、その一つは『かめれおん日記』の一部改稿用の草稿であり、これは『かめれおん日記』の最終的脱稿が、昭和十四年三月以降であることを立証する資料として注目されるが、それはさておき、それと並んで『光と風と夢』の初期構想かと見られるものがある。第四群は、『光と風と夢』におけるスティヴンスンの基本的性格についての構想メモで、内容的には、作品の第九章の草稿に近い部分もある。従って、もしこのノートの基本性格が第三・四群を主とするものであった場合には、『光と風と夢』という長篇作品の構想メモはもっと量的に多くなり、第四群メモの次の余白（これは、ノートを前後から使う形になっているのだから、第二群メモの後の余白でもある。）も、これで埋められてしかるべきであるが、実際はそうなっていない。それはつまり、第一・二群のメモの方が、このノートに対して、いわば先住権のようなものを持っていたために、第二群メモの後に草稿用の余白が確保されていたためではないかといった解釈が可能になる。

さらに、メモの内容に立ち入って吟味してみると、次のような事実につき当たる。第一・二群の作品構想メモは、確かに独立した作品の構想としての輪郭を持ちながら、そのままの形では、ついに完成されなかったわけだが、そのかわり、部分的に、『光と風と夢』の中に、生かされているのである。つまり、第一群メモの構想における主人公のイメージは、『光と風と夢』十九章において、スティヴンスンが町の酒場で出会うインテリニヒリストの白人雑貨商のイメージの中に再生している。（四十歳前後の男で、足を組んだ膝頭の辺をがく〳〵顫はせながら独り酒を飲んでいるのだが、その荒れた皮膚に唇だけいやに紅いのは少々気持が悪い、と描かれ、彼には、家族も家も健康も希望もないと語らせている。）第二群の作品構想における主人公、八十歳の漢学者の見る幻覚は、やはり『光と風と夢』十九章において、スティヴンスンがアピア街道を歩いている時に襲われる幻覚として生かされている。（魂が身体を抜け出し、自分自身に対して「お前は誰だ」と問い詰めるというものである。この主題は『木乃伊』のそれとも関連するもので注目を要するが、この点については続稿において取り上げることにする。）つまり、『光と風と夢』十九章において、作者の感情移入がある部分には、ここに書かれていた未完の短篇構想が、解体吸収されていると見られ、この点からしても、第一・二群のメモは、『光と風と夢』の構想が確定する以前の成立であると考えるのが妥当であろう。

さて、そうだとすると、「ノート第九」の第一群メモの作品構想は、その主人公のイメージを『光と風と夢』の中の一部として吸収されている一方、その主題と作品の骨格構造の方は、主人公のイメージを「人虎伝」に借りて、『山月記』へと飛躍をとげたことになる。

三

それでは、『山月記』は『光と風と夢』より先きに、あるいは同時並行的に書かれたのであろうか。それとも、後から書かれたのであろうか。『山月記』の成立時期を推定しようとする場合の要点は、ひとまずこの一点に絞られるといってよい。この点を明らかにするためには、第一群メモの構想が、『山月記』へと成熟するための一段階として、『光と風と夢』が必要であったか否かを考えてみなければならない。ところが、こういう形で問題を捉えようとすれ

ば、作者の問題意識の在りどころを確認するために、これらの作品の前に来るものを見ておく必要がある。が、その前に、中島の年譜を別表のように一部訂正しておく必要がある。

中島敦略年譜

昭和14年3月以降	『かめれおん日記』最終脱稿（「ノート第九」第三群メモ）
〃 14年末～15年初頭	『悟浄出世』執筆（昭和14年手帖及び昭和15年手帖メモ）
〃 14年夏ごろ	「ノート第九」第一・二群メモ成立
〃 15年秋～16年1月ごろ	『光と風と夢』成立（氷上書簡及び昭和15年手帖メモ）
〃 16年初頭～6月まで	『文字禍』成立（昭和十六年手帖メモ）
〃 16年5月～6月まで	『悟浄歎異』前半執筆（田中西二郎宛書簡深田久弥宛置手紙）
〃 16年6月28日	パラオへ出発
〃 17年3月17日	パラオより帰国
〃 17年5月	『弟子』成立
〃 17年6月	『悟浄出世』最終脱稿（杉森久英書簡）
〃 17年8月ごろ	『悟浄歎異』最終脱稿（「ノート第四」メモ）

注（　）内は年譜作成の主たる根拠となった資料を示す。本文参照のこと。

この年譜において、従来の説と異なる部分は、『悟浄出世』の執筆を、昭和十四年末から昭和十五年初頭にかけての時期に置き、『文字禍』の成立を、昭和十六年の前半としているところにある。『文字禍』については、ここで直接関連が無いので、評細は続稿にゆずることとして、要点だけを述べれば、『文字禍』の草稿「文字」の資料となったメモが、昭和十六年の手帖中に見いだされるのである。『悟浄出世』については、作者が南洋から帰国後の作品と考えられて来たが、その根拠となったものは、昭和十七年七月二十二日付の作者宛杉森久英書簡（及び六月二十七日付同書簡も関係があるが。）に『弟子』と『悟浄出世』を見た旨が記されていることがあるのみである。筆者も、この作品の最終脱稿の下限をこの時点に置くことに異存はない。が、昭和十四年の手帖の末尾のメモの中に、「沙紅（マヽ）　エビ也」とあり、十五年の手帖の冒頭部分に「天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那ラ、摩睺羅伽、人、非人」とある。前者が『悟浄出世』㈢に出てくる「年を経た蝦の精」を「沙虹隠士」と名付けているのと結びつくなら、後者もまた、同じく㈣に登場する木叉恵岸の言葉の中にそっくり利用されている言葉である。これだけで断定するつもりは毛頭ないが、資料に乏しいこの作者の場合、この資料によって、この作品の執筆時期を推定することも、あながち妥当性を欠くことにはなるまい。

ちなみに、『悟浄歎異』の脱稿時期についても、ここで一言ふれておく。この作品については、原稿の末尾に（昭十四、一、十五）と記されているので、従来、これが成立脱稿の日付と解釈されて来た。しかし、「全集」解題において、郡司氏はこれに疑問を投げかけておられる。今、仮りに前者の説に従うと、次の四つの疑問が生じる。そのうち二つは郡司氏の指摘されているもので、昭和十六年五月八日付田中西二郎宛書簡、及び同年六月（？）の深田久弥宛置き手紙に、「孫悟空や八戒の出てくる」「西遊記」を執筆中であるが、「一向にはかどらない」旨を記している理由は何かということ

と、昭和十五年から十六年にかけて、中島と交流のあった深田久弥氏に、『虎狩』や『かめれおん日記』等の習作までも見せているのに、それよりはるかに小説的完成を見せている『悟浄歎異』を昭和十六年六月の段階で、まだ見せていないのは何故かということである。他の二つは、先述の杉森書簡において、作者が杉森氏に手渡しているのは、『弟子』の他に『悟浄出世』のみであるらしいが、この説に従うならば、この時点で連作二篇は完成していたはずであるのに、そのうち一篇のみを杉森氏に見せているのは何故かということと、「南洋譚」の諸篇の草稿や創作メモが書かれているから、十七年夏ごろ使われたと見られる「ノート第四」（なお、このノートの一頁目にあるメモは、昭和十七年八月九日発表のソロモン海戦の〝戦果〟の報道――東京日日新聞による――の数字と多分に符合する。この点も留意されてよい。[注6]）の中に、明らかに『悟浄歎異』の創作メモと見られる「七十二般、地慾変化法、觔斗雲、如意箍棒、／（略）唵嘛呢叭咪吽」といったものがまじっているのはなぜかという疑問である。これらの疑問も、この作品が昭和十六年五月ごろから執筆され、最終的脱稿を昭和十七年の夏と考えるならば、一挙に氷解する。また、作者は、昭和十七年三月十七日、南洋から帰国後、ただちに肺炎になり、六月に入ってようやく回復している。従来のように、この間に『悟浄出世』と『弟子』との二篇を完成しているというのも、いささか無理のある推測で、『悟浄出世』の一応の完成は昭和十五年頃とし、『悟浄歎異』は十七年夏の最終脱稿と考え、その完成のめどがついた段階で、前篇『悟浄出世』を杉森氏の手に渡したのではあるまいか。

ただ、そうなると、浄書原稿末尾のメモは何を意味するかという疑問が残るが、これについては、先にも少しふれたように、『かめれおん日記』も、その最終脱稿は昭和十四年三月以後であるにもかかわらず、その原稿の末尾に、（昭和十一年十二月〔二十六〕）と記されており、このメモについて、郡司氏は、「全集」第一巻解題において、「作品の主題を手にした時の日付とみる方が妥当かもしれない。」とされているが、『悟浄歎異』についても、これと同様の考え方ができるのではあるまいか。

この場合、従来の『悟浄歎異』十四年、『悟浄出世』十七年成立説に立脚した作品解釈に対する疑問も出てくるが、この点については、稿を改めて卑見を述べたい。

さて、このように見てくると、「過去帳」二篇において、自己の生き方に行き詰まりを感じた作者は、『悟浄出世』で、そこからの脱却の道を探り、主人公悟浄をして、ついに「とにかく、自分でもまだ知らないでゐるに違ひない自己を試み展開して見ようといふ勇気が出て来た。」と言わしめているが、これは作者自身の心情を仮托したものと見られよう。これ以後、作者は有限な才能をもって、なお、積極的に人生を生き抜く人物への関心を急速に深めていくのであるが、『悟浄出世』の次に『光と風と夢』が来るのであれば、主人公スティヴンスンは、作者のこうした自覚に基づいた理想像造形の最初の実験であったことになる。逆に、『山月記』の方が先きに来るのであれば、自己の行くべき道におおよその見当をつけた段階で、過去の自分を振り返っての悔恨を描いたものということになる。観念的論理だけの筋道を追うならば、いずれの解釈も可能なわけで、ここでは、より具体的な検討を通して、妥当な解釈を求めなければなるまい。

ここで注目されるのは、これら二つの作品執筆に先立って構想されたと見られる「ノート第九」の第一群メモにおいては、「臆病な自尊心」を中心主題とし、その基調低音が諦念であるのに、それが『山月記』として完成された段階では、同じ主題を扱いながら、その基調低音が悔恨に変わっているということである。第一群メモの構想に諦念が出て来た理由は、おそらく『狼疾記』の「畢竟、俺は俺の愚かさに殉ずる外に途は無いぢやないか。凡てが言はれ、考へられた後に結局、人は己が性情の指さす所に従ふのだ」という考え方が、その底流にあるからであろう。この考え方に従う限り、「臆病な自尊心」を自己の性情と自覚している主人公にとって、自己の性情に基づく悲劇は、ただちに運命悲劇的性格を持つものとして理解されるはずで、ここに悔恨の生じる余地はない。つまり、作者は、「自己を試み展開して見よう」と言いながら、再び、「臆病な自尊心」の問題に突き当たっているわけである。ところが、『山月記』の李徴は、虎になってからではあるが、この「臆病な自尊心」の克服可能なものであることを悟り、ここに悔恨が発生しているのである。この変化は重要ではあるまいか。「臆病な自尊心」の臆病さの原因は、『狼疾記』にあるように、「才能の不足を他人の前にも自らの前にも曝し出すかも知れない」危惧にあるわけだが、李徴は「己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐる」ことに気付いた時、これを克服可能なものであったと考えるに至ったのである。

では、作者はいつこれを知ったのであろうか。単なる心境の変化として、これを説明することも可能かもしれない。しかし、ここに『光と風と夢』という作品があり、しかも、作者がこの作品において、制限つきの才能と短い命しか持ち得なかったにもかかわらず、その所与のものを十全に生かすことによって、種々の欠点を昇華し、充実した人生を送り得たスティヴンスンを造形することを目的として、この作品を制作していたとすれば、どうであろうか。作者の意図は、「ノート第九」第四群の構想メモに明確である。

（略）彼は結局、魅力にはとんでゐるが、美しいけれども深味のない物語作者にすぎなかったのではないか。と或人は非難する。

或ひはかうもいへるのではないか。賢明な彼〔を守る〕のヂェニィ（その導きによって彼は彼の運命を辿ったのだが）が彼の寿命の短いであらうことを知って、何人にとっても四十歳以前に人間修業を目標とする近代小説道（その傑作を生むことは恐らく不可能であらう所の）を捨てさせ、その代りに、この上なく魅力に富んだ美しく怪しい物語の構成とその巧みな話法との習練に〔向〕（之ならば、たとへ早死しても少くともいくつかの、良き美しきものは残せよう）向はせたのであると。とまれ彼のあらゆる人間的〔欠陥〕未熟にも係らず、たゞ比の一筋の道に生き抜くことによって、凡ての欠点も救はれ昇華され得たので〔ある〕はないか。

（傍線筆者）

この点を考慮するならば、限界の明らかな才能であっても、それを完全に生かし得たならば、種々の欠陥さえも昇華し得ることを作品において確認し得た時、「ノート第九」第一群メモの構想の主人公の諦念を、『山月記』の李徴の悔恨へと変質せしめることができたと考えるのが妥当ではあるまいか。

いや、このように考えて来ても、まだ、『光と風と夢』『山月記』の二作品を、同時並行的に執筆している可能性は否定できない。ただ、ここに看過できない一つの事実がある。それは、『山月記』の李徴の場合、作者は明らかにスティヴンスン的人物を視野の一方に置いて、これを造形しているのだが、スティヴンスンを造形する作者は、その視野の内に李徴的人物を収めていないということである。スティヴンスン的人物を知らなければ、李徴の悔恨が成立しないのは見て来た通りだが、スティヴンスンの場合は、自己の能力の限界を自覚しつつ、李徴の悔恨を踏まえて、自分の道を貫いているのではなく、自分の能力に限界があるのではないかという不安におびえつつ、これに深くかかわらないことで、あるいはこれを頭から否定することによって、彼はようやくその積極的な生き方を持続し得ているのである。彼のそうした精神の保ち方を、顕著に現わしているところが、作品の十九章の中にある。

机に向つて昨夜の続きを四五枚も書いた頃、私の筆ば止った。行悩んで頬杖をついてゐた時、ひよいと、一人の惨めな男の生涯の幻影が頭の中を通り過ぎた。その男は、（略）才能もないくせに一ぱしの芸術家を気取り、（略）スタイルばかりで内容の無い駄作を書きまくり、（略）結局は、南海の果で、泣き度い程北方の故郷を思ひながら、惨めに死んで行く。

ちらりと一瞬、閃光のやうに斯うした男の一生の姿が浮かんだ。私ははつとみぞおちを強く衝かれた思ひがし、椅子の上にくづほれた。冷汗が出てゐた。

暫くして私は回復した。之は何か身体の工合のせゐだ。こんな莫迦な考が浮ぶなんて。

しかし、自分の一生の評価の上に、ふと、さしたかげは中々拭ひ去れさうもない。

（略）

夜八時、すつかり元気になつた。（略）今朝はどうかしてゐたんだ。俺が下らない文学者だと？　思想がうすつぺらだの、哲学が無いのと、言ひ度い奴は勝手に言ふがいい。要するに、文学は技術だ。（『光と風と夢』十九章より。傍点原文。傍線筆者。）

自己の才能や人生に対する評価に不安を覚えつつ、それがいずれも気分の問題として解消されてしまっているのは、見られる通りである。彼の人生の生き方の選択は、デュニイの導きによるものであったから、李徴の悔恨を踏まえたものでないのもやむを得ないが、それならば、サモア島という白人文明から隔たった、一種の批評希薄地帯において、「人に嗤はれまいとの懸念を忘れて、真に思ふ事のみを言ひ、真に欲する事のみを行」なう天衣無縫のスティヴンスンが描かれているのかというと、そうでもなく、彼は海を越えてやってくる批評に対してすら、過敏なほどに反応している。それでもなお、彼が強気に押して行けたその自信は、先きの引用にも見られる通り、正当な批評を経たものでないから、単なる楽観主義でなければ、子供じみた強がりの印象をまぬがれない。この小心さと強がりの背景に「己より遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐる」という認識を見ることは、おそらくできまい。

作品に常に作者のすべてが投影されるとは言えない。しかし、少なくとも、作品を「臆病な自尊心」の主題にそって見る限り、『山

月記』の李徴の悔恨は、『光と風と夢』の成果を踏まえてこそ出て来るものであって、その逆ではないといえよう。

このように考えてくると、芸術家のエゴと倫理との矛盾についての煩悶の問題についても、理解しやすいようである。芸術家が、「自己を試み展開して見よう」とすれば、そのエゴと倫理との矛盾が激化するのは一般のことであるが、この点について、作者はまず『光と風と夢』において、完全なエゴイストとしてのスティヴンスンを造形しようとしたふしがある。「ノート第九」第四群メモの中に、次のような一文があるからである。

自分のegoisticなことをハッと、事毎に感ずる、が、それでもう一度考へ直して、芸術家はegoisticでなければならぬ、それを意識することは一つの退化かもしれぬと思ふ。

作品では、ここに示された過敏な倫理家としての側面は弱められ、「殆んど本能的に」「頭は間違ふことがあっても、血は間違はないものであること」を信じて、「我々の中にある」「我々より賢いものの導いて呉れる其の唯一の途を、最も忠実、勤勉に歩むことにのみ全力を払ひ、他の一切は之を棄てて顧みなかつた」スティヴンスンが描かれている。「俗衆の嘲罵や父母の悲嘆をよそに、彼は此の生き方を、少年時代から死の瞬間に至るまで続け」ることによって、彼は、「凡ての欠点も救はれ昇華され」て、「真の自己」を実現したわけである。かかるスティヴンスンの造形に、ある程度成功した作者は、この段階で、自己の生涯に一つの可能性を見いだし得たと考え、勇気を得たのではあるまいか。『光と風と夢』を書き終えた頃から、彼は、横浜高等女学校の職を辞め、作家として立つことを真剣に考えはじめている。教師の職を辞めた原因としては、宿痾喘息の治療のための転地療養を考えていたこともあったが、作家生活に入ることを第一義的に考えていたことは、昭和十六年二月二十六日付及び三月四日付の父田人宛書簡に明らかである。

勿論、自分の勉強の上からは今の学校を離れることが確かに急務なのですが、単に、僕の身体のことだけを（略）考へるなら、横浜を離れるにしても、久喜や世田谷では何にもならないと思はれるのです、（略）しかし、「勉強の為に勤めは辞めたい」、「けれども久喜や世田谷では駄目だ」、といふのでは、之は余りに我侭で、話になりませぬ故、昨日の御話のやうにお取決め願って、身体の方はどうならうと、とにもかくにも一年間、御情に甘えて勉強させていたゞかうと考へたのでございます、（昭和十六年三月四日付、田人宛書簡より）

ここにある「勉強」が、創作のためのそれであることに疑問の余地は無い。また、同じ書簡に、「本当は南洋の方へ行きたいのですけれど之も経費の都合で、〔どう〕むづかしさうです」とある。このあたりからも、作者が、スティヴンスン的生涯に心惹かれていたことが、うかがわれるかもしれない。

しかし、こうした決意は、作者個人の健康の問題のみでなく、実生活上の問題として家族をも捲き込むことになるわけで、こうした問題を押してなお、自己の道を貫きたいと思う自身の姿が、作者自身の目に獣と見えたとしても不思議はない。『山月記』の李徴の叫びに、作者自身の肉声を感取している人々は多い。[注(7)]「飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を堕すのだ」と言う李徴の言葉の裏に、

作者自身のこうした現実が踏まえられていたのではないか。この言葉には、作者自身の自虐的自己確認の響きがある。『山月記』の化虎とは、人間的統制のきかない所まで肥大化してしまった、作者自身の猛獣的性情の二側面の象徴にほかならない。ただ、「臆病な自尊心」の問題が未解決である間は、エゴと倫理の矛盾の問題が、潜在していても表面化することはない。作者にとって、前者の問題に克服の可能性が見えた時、後者の問題が一挙に顕在化して来たのではあるまいか。

以上のように見て来るならば、『山月記』の成立時期は、『光と風と夢』以後とするのが妥当であろうし、やがて作者が、折角得た一年間の休職期間を、創作のためのみに使うこともできず、生活と健康、そして創作の三者の調和を願う形で、南洋行の道を選んだ理由も了解されるであろう。

四

かかる見地からする限り、本稿の最初に掲げた佐々木充氏の説の根底にある判断、すなわち、『光と風と夢』は、「古譚」「古俗」の「六篇に六人の主人公の形をとって表現されていた主題を、あらためて一人の人物の生の上に統一的に打ち込めたものである」とされる見方には同じ得ない。しかし、『山月記』が「古譚」四篇の中の一篇であることに留意するならば、最終的結論を出す前に、他の三篇の成立時期や、「古譚」全体の創作意図についても検討しておかなくてはならない。が、これらの点については続稿にゆずりたい。

注(1)深田久弥氏の「中島敦の作品」（「近代文学鑑賞講座」18巻所収）によると、「古譚」は最初「古俗」の二篇を含む六篇であったとされており、この証言を採用する研究者もあるが、郡司勝義氏は、「中島敦全集」第一巻解題において、昭和17年3月31日付の深田書簡（中島宛）等の資料によって、「古譚」が最初から四篇であったことを、立証された。

(2)郡司勝義「中島敦全集」第一巻解題及び第三巻年譜。

(3)佐々木充『中島敦』（昭和43年3月桜楓社刊）「方法と主題」及び年譜。

(4)浜川勝彦『中島敦の作品研究』（昭和51年9月明治書院刊）「『古譚』から『古俗』へ」

(5)(4)に同じ。

(6)この部分については、和歌山大学学生の北垣有信君の調査による。

(7)例えば、中島タカ「お礼にかへて」（「中島敦研究」昭和53年12月筑摩書房刊所収）や深田久弥「中島敦の作品」（近代文学鑑賞講座」18巻所収）等。

付記、本稿は、昭和53年11月19日、広島大学国語国文学会に於て発表したものの一部に、加筆したものである。